

〈一般投稿論文〉 [研究論文]

占領期日本(1945-1952)におけるラジオ番組『真相はこうだ』 の批判的談話研究

— 〈国民の声〉による〈会話〉を考える—*

太田 奈名子

東京大学大学院生

The present study provides a Critical Discourse Study employing the discourse-historical approach to examine *Shinsō wa kōda* (*Now It Can Be Told*), a radio program broadcast under GHQ in Occupied Japan. Previous studies point out that it was a documentary drama to expose the militarists' war guilt and inculcate listeners with anti-militarism. By examining its socio-historical background, discourse structure, and linguistic characteristics, this paper from a linguistic point of view reveals GHQ's hidden intentions embedded in the program. The author concludes that the program's essence lies in its fabrication of Japanese public voices, performing a dialogue on the surface yet delivering the authority's monologue at the core.

キーワード： 批判的談話研究、占領期日本、メディア、ラジオ、『真相はこうだ』

1. はじめに —本研究の問題意識—

メディアのことばを考察する言語学的研究は、新聞・ラジオ・テレビ・SNSなど、多様なメディアにおける言語コミュニケーションに一貫した構造と体系を見出すことにより、学術的研究と社会の距離を縮めることに寄与してきた。しかしながら、考察対象には現代社会のメディアが据えられることが多く、歴史的一次史料に目が向けられることは少なかった。憲法改正や米軍基地問題に関するニュースなど、現在私たちが日常的に触れる

* 本稿執筆、学会誌掲載にあたり多くの有益で貴重なご指摘をくださった3名の査読者の先生方と滝浦真人編集委員長、一から丁寧にご指導くださった大堀壽夫先生、CDSへの門戸を開いてくださった名嶋義直先生、温かい発表の場を設けてくださった高田博行先生、三宅和子先生、新井保裕先生、日々学校で時間を割いてくださった東京大学大学院助教の鴻野知暁氏、同院生の堀川遼太氏に、心より感謝申し上げます。

本稿の内容の一部は、第19回日本語用論学会、第24回ひと・ことばフォーラム特別公開研究会における筆者の口頭発表に基づく。不備と誤りは筆者に帰する。なお本稿は、日本学術振興会特別研究員奨励費(18J10250)による研究成果の一部である。

メディア報道を考える上でも、戦後日米関係という権力構造の礎が築かれた占領期日本におけるメディアをマクロ語用論 (macro-pragmatics, e.g. Verschueren 1999) や批判的語用論 (critical pragmatics, e.g. Mey 2001) を始めとする様々な言語学的見地から今改めて見つめ直し、メディアを介して受け手を操作する実践がいかに行われたのかを考察することは極めて重要だと思われる。

本稿は、占領下日本社会におけるラジオ放送を歴史的なメディアのことばと捉え、言語学的観点から考察する試みである。具体的には、言語が社会的権力を生み出し、強化する実態を浮き彫りにする批判的談話研究 (Critical Discourse Studies、以下 CDS) の理論的枠組みに依拠して、戦後間もなく GHQ により制作されたラジオ番組『真相はこうだ』を分析することにより、GHQ はラジオを通して聴取者にどのようなメッセージを訴え、どのように行動することを求めていたのかを明らかにする。

本稿は以下のように構成される。第 2 節で『真相はこうだ』の制作背景を、第 3 節でラジオに関する言語学の先行研究を紹介する。第 4 節で CDS と談話歴史学的アプローチについて概説し、分析方法と手順を示す。第 5 節で『真相はこうだ』のテキスト分析を行い、番組を制作した GHQ の意図を明らかにする。第 6 節で『真相はこうだ』のコンテキスト分析を間テキスト性の観点から行う。最後に第 7 節で結語を述べる。

2. 『真相はこうだ』の制作背景

ラジオ番組『真相はこうだ』はいかなる経緯で制作され、どのような内容のものであったのか。占領初期における GHQ のメディアの活用に関する先行研究を参照して、当該番組に関して未解決であった問題を明確にしたい。

GHQ は非軍事化・民主化という日本占領の目的を完遂する有効な手段としてメディアを重要視した。メディア統制を担当した GHQ 傘下の民間情報教育局 (Civil Information and Education Section, 以下 CIE) は、「日本の敗戦の真実、日本の戦争有罪性、現在および将来の日本の災害と苦難に対する軍国主義者の責任」(有山 1996: 245) を周知させる任務を担い発足した。日本軍が真珠湾を攻撃した開戦記念日に合わせて 1945 年 12 月 8 日より 10 日間連続で、CIE は大東亜戦争観を否定し新たに太平洋戦争史観を提示する新聞特別連載『太平洋戦争史』を主要各紙に掲載することを命じた。

『真相はこうだ』は、『太平洋戦争史』と同史料をもとに制作されたラジオ番組である。CIE の用意した台本を日本人声優が読み上げて録音され、同年 12 月 9 日から 10 回にわたり、毎週日曜日夜 8 時から 8 時半のゴールデンアワーで放送、月・木曜日に再放送された重要度の高いものであった (竹山 2002)。文語体で解説文のように書かれた『太平洋戦争史』とは対照的に、『真相はこうだ』は、反軍国主義者かつ民主主義者の文筆家に対し、戦争について疑問を持つ少年太郎が質問をするというやり取りを描いたドキュメンタ

リー・ドラマであった(竹山 2011)。しかしながら、聴取者が慣れていない音響効果を多用し、「懲罰的」、「断定的」に「上からの押しつけ」による「暴露」(竹山 2002: 337-338)がなされたため、『真相はこうだ』は国民の大きな反発を招いた。¹

メディア史の先行研究においては、『太平洋戦争史』と『真相はこうだ』は「一つの情報なり素材がメディア間を横断する [...] 『クロス・メディア』」(竹山 2011: 17) の典型であり、前者が「論理に訴えるものであった」のに比べ、後者は効果音の多用という決定的特徴を持った「情緒に訴える」「音による劇画」(p. 34) であったと指摘される。

しかし、CIE がラジオという聴覚に頼るメディアの利点を効果音の使用にのみ見出していたのならば、『太平洋戦争史』を単に読み上げ、そこに音響を加える形で放送をすることも可能であっただろう。よって、先行研究の指摘から、同じ素材が用いられたにもかかわらず、書きことばのメディアである新聞で採られた解説文の独話形式がなぜ話しことばのメディアであるラジオでは質問・回答の会話劇の形式へと変化を遂げたのか、つまり、太郎と文筆家という日本国民同士のやり取りを描く会話劇のスタイルを選択した CIE にはどのような意図があったのか、という新たな疑問が浮上する。この課題を乗り越えるべく、次節では、ラジオのことばに関する先行研究を概観する。

3. ラジオのことばに関する先行研究

まず、ラジオと戦争というテーマを言語学的視座から考察した研究として、1936年から1955年に放送された小林勝制作のラジオドラマの台本を分析し、ラジオのことばの世界と当時の社会との繋がりを明らかにした遠藤(2004)が挙げられる。なかでも、命・死・国・世界といった「戦争を志向させることの多いことば」(p. 166)を手掛かりに、電子化した台本に統計分析をかけた早川(2004)は、「日常的な会話と思想性を持った会話が混在するところにラジオドラマによる教化の巧妙性が存在する」(p. 165)と論じ、慰安性・娯楽性を強調したラジオドラマに政治的意図を見出す重要性を指摘した。

次に、ラジオにおける会話のやり取りに着目する言語学的研究を見る。これらの多くは現代のラジオ番組を対象とし、聴取者の悩みや質問を電話で受け付ける相談番組を、談話分析の手法により分析する。医療・人生相談番組の両方を扱い、主にザトラウスキー(1993)の「話段」と「発話機能」の概念に依拠して分析を行う鈴木(2002, 2003)は、質問に違いはあれど、ラジオの相談の談話には開始部・中間部・終結部という3つの「大話段」からなる基本構造があること、及び各部において相談者と回答者それぞれが典型的に

¹ 『太平洋戦争史』に始まる CIE の新聞・ラジオ番組の企画・制作についての経緯と考察は、竹山(2002)、太田(2018)を参照。

使用する言語的特徴があることを示した。加えて、中間部においては〈相談内容確認〉→〈回答〉→〈回答確認〉という3つの「話段」の流れが認定できるとし、参加者の役割や目的の明確さゆえに現れる相談の談話の特徴を突き止めた。²

先述のように、『真相はこうだ』はCIEが制作した虚構の会話であり、いわゆる生の声による会話ではない。しかし、鈴木の見解を参考にして、『真相はこうだ』の談話構造と会話参加者の言語的形式・特徴を考察することにより、太郎と文筆家の関係性や、それぞれの役割とコミュニケーションの目的を明らかにできると考える。

4. 研究姿勢と手法 — CDS と談話歴史的アプローチ —

CDSは談話分析あるいは談話研究の分野に属するが、CDSに特有なのは、「言語単位それ自体を研究するのではなく、社会現象を分析し、理解し、解説することに関心を持つ」（ヴォダック・マイヤー [2015] 2018: 2）点である。CDS研究者は画一的な理論や分析方法を持たず、CDSは「『姿勢を伴った』談話分析」、つまり、研究の焦点を社会問題に置いた「学問を行う上での一つの批判的な見解」（ヴァン・デイク [2001] 2010: 134）であるという共通認識を持つ。³ 言語を切り口に社会現象を研究するため、CDSは、話しことば・書きことば両方を対象に、理論面および関連史料収集などデータ面の両面で学際性を担保しつつ、一見無色透明なメディア報道や教科書に潜む性差別・人種差別・ナショナリズムなど様々な社会的不平等を考察する。こうしてCDSは、話し手・書き手が言語を媒介に権力を維持し、自身にとって有利に働く社会構造を強固なものにするその過程を、言語学的観点から明らかにすることに貢献している。

筆者はCDSの立場に立ち、戦後日本社会で新たに生産され、定着しようとしていた社会現象としての占領という権力の可視化を目標に研究を進めている。『真相はこうだ』は一種のプロパガンダであり、無色透明でないことは明らかであるが、本稿においては、CIEが日本国民に理解させたい事柄がいかに番組の言語に反映されていたのか、及びその言語の裏に潜むCIEの日本占領をめぐる意識がどのようなものであったのかという具体的問いを設定する。占領期当時の歴史的な文脈も踏まえた上で談話分析を行うにあたり参考にするのは、数多くあるCDSのアプローチの中でも、談話の持つ歴史を重視し、テキストと同等に、テキストの置かれたコンテキストにも注意を払う談話歴史的アプローチ

² 鈴木（2002, 2003）を引用して、1965年から続く『テレホン人生相談』を司会者の役割に焦点を当てて分析し、司会者が相談者とラジオ聴取者を番組に容易に参加できるように用いる談話標識などを明らかにした星野（2006）も参考になる。

³ CDSの多様なアプローチの解説はヴォダック・マイヤー（[2015] 2018）を、最新の研究動向はHart and Cap（2014）を参照。

(the discourse-historical approach、以下 DHA) である。⁴

DHA を提唱したヴォダックによれば、具体的分析の対象となるテキストの上位には、条令・演説・新聞など、社会的に慣習化されたコミュニケーション様式としてのジャンルが存在する。さらに、ジャンルの上位には言語的实践の集まりとして具現化されるディスコース⁵が存在する。ディスコースは多くのディスコース・トピックを包含し、テキストやジャンルを相互に結び付けている。ディスコースを構成する一本一本の糸としてのテキストの絡み合い、つまり間テキスト性 (intertextuality) に着目することで、他のテキスト、他のジャンル、他のディスコースへと、DHA は分析対象テキストと関連する周辺史料を広く手繰り寄せ読解することを求め、それらが埋め込まれた歴史的背景を総体的に浮かび上がらせることを可能にする (ヴォダック [2001] 2010)。

また DHA は、テキストの背後に潜む話し手・書き手の意識を浮き彫りにするための具体的な分析ツールとして、下記5つのディスコース・ストラテジー⁶を用いることが特徴的である。ヴォダックは、これらを「特定の社会的、政治的、心理的または言語的な目的を達成するために採用される実践」([2001] 2010: 106) と定義している。

- ① 命名： 特定の人々・物事が、どのように呼ばれ、言及されているのか？
- ② 叙述： その人々・物事に対して、どのような属性が与えられているか？
- ③ 論証： どのような論拠に基づいて、疎外や差別、圧迫、搾取が正当化ないし合法化されているか？
- ④ 観点付け： どのような立場から、レッテル化や議論が行われているか？
- ⑤ 強化・緩和： 個々の表現は誇張されたり、曖昧にされたりしているか？

これまで見た DHA と、第3節で触れた先行研究の知見をもとに、次節では、GHQ による日本の占領というディスコースを具現化した、ラジオ放送というジャンルの下位に位置する、『真相はこうだ』のテキストを分析する。

⁴ 日本語の談話に DHA を用いた研究として、神田 (2015)、名嶋 (2015) を参照。

⁵ discourse の概念の解釈は各々の CDS 研究者により違う。ヴォダックの discourse の定義を他のものと差別化するために、談話ではなくあえてディスコースと訳す。

⁶ 下記引用は、井村 (2005: 29-30) から抜粋、修正したもの。各ストラテジーの詳細は、ヴォダック ([2001] 2010: 105-110) を参照。また、ヴォダックは、CDS と語用論の分野横断的研究の可能性に関して議論する Wodak (2007) において、ほのめかし・含意・前提など、読み手・聞き手が非明示的なテキストから情報を間接的に推察する過程を考察する語用論の概念が、CDS の分析ツールとして有効かつ有益だと述べている。

5. 『真相はこうだ』のテキストの分析

本節の分析の手順を示す。第1項で相談の談話構造と『真相はこうだ』のそれとを比較する。第2項で太郎と文筆家が担う役割を明らかにする。第3項ではその役割の交替が見られる発話、つまりテキストの逸脱に着目し、二人の関係性を掘り下げて考える。第4項では、テキスト内における聴取者の位置付けを考える。第5項では、太平洋戦争史観を聴取者に説得する言語使用の特徴を見る。最後に第6項では、先の大戦とは関係のない、日本占領の今をめぐるメッセージを考察する。

5.1. 『真相はこうだ』の談話構造

分析対象とするテキストは、日本軍の開戦経緯がテーマの『真相はこうだ』第1回である。引用は竹山（2011）に依る。スクリプトは台本ではなく竹山が書き起こしたもので、全編ではなく一部は要約であるが、太郎と文筆家の会話を中心に重要と判断した部分を抜粋して分析データとし、本稿末尾の付録に示した。⁷ 本稿本文で引用する箇所は下線、特に重要な箇所は太字、省略箇所は [...] で記した。さらに、鈴木（2002, 2003）を参考に、番組の会話の参加者の出入りで「開始部」「中間部」「終結部」という3つの「大話段」を、参加者の目的、役割、話題の変化により「話段」を区分し、付録の表の右部に示した。

下記の図1は、番組の談話構造をまとめて図示したものである。

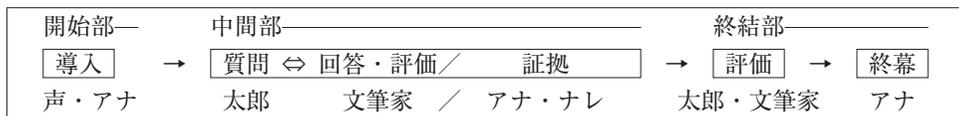


図1 『真相はこうだ』第1回の談話構造

図1を追うようにして、「大話段」ごとに内容を確認する。まず、強烈な音楽で幕を開ける「開始部」では、本編の始まりを急かすように飛び交う聴取者を模した複数の声を、「まあ、まあ待ってください」(3)⁸とアナウンサー（以下アナ）が鎮め、それから番組の概要が説明される。

続いて「中間部」では、太郎と文筆家の会話が展開する。アナとナレーター（以下ナレ）は会話に直接は参加せず、ニュースレポーターのように情報を読み上げる。文筆家は、時に効果音とともに会話の間に差し込まれるアナとナレのレポート（10）（19）を証拠に太

⁷ 『真相はこうだ』全10回の内、第1、7、10回原稿が公刊済みだが、後者2回は僅かな部分しか内容が明らかにされていない。原稿の史料調査は今後の課題である。

⁸ 以下、本稿で丸括弧内に示された数字は、付録の左の欄に付した数字と対応している。

郎の質問に答え、自身の回答に対し自ら評価を加える。この構成から、CIEの狙いを二点挙げることができる。一つ目は、質問・回答の単調なやり取りで聴取者を飽きさせぬこと、二つ目は、文筆家とは違う二人の声優の声で根拠を示すことで、文筆家の回答は偏向しておらず証拠立てて論じられるものであると、その客観性と信頼性を高めることである。

このように、「開始部」には声の多重性で番組の情報価値を高める強化ストラテジー、「中間部」には声の多声性で番組の客観性と信頼性を高める観点付けストラテジーという、聞くメディアであるラジオの特性を活かしたストラテジーが見出せる。

「終結部」は、登場人物の変化ではなく、太郎の役割の変化により「中間部」との区切りが付けられる。太郎は「中間部」では質問を続けてきたが、「終結部」ではこれまでの文筆家の回答に対して総括的な評価をする。そのあと文筆家による評価が続き、アナの一言で番組の幕が降りる。着目したいのは、「中間部」から続いてきた太郎と文筆家の会話が突如流れ出すベートーベンの『運命』(26)により遮られ、「開始部」で聴取者を模した声を鎮めたアナが再び登場する点である。ここから、「中間部」の会話内容とは別に、「開始部」と「終結部」を貫く何らかのメッセージが聴取者に対して発せられていた可能性を指摘できる。この点は、第6項の分析で再び検討する。

5.2. 「～んですか」「～んですね」に見る、太郎と文筆家の役割

鈴木(2002, 2003)によれば、ラジオの相談の談話の「中間部」では3つの「話段」が確認できる。1つ目は、回答者が相談者から補足情報を引き出す〈相談内容確認〉である。相談者から与えられる情報に対し確認の質問をしたり相槌を打ったりすることで、回答者が聞き役に回り相談者の状況を把握するという役割交代が見られる。2つ目は、回答者が相談者の状態を整理しながら説明を与え、相談者が相槌などで応える〈回答〉である。相談者は、例えば漢方薬の名前など聞き慣れない事柄が提示された際には、回答者に対し言い直しを要求する。3つ目は、回答に対し相談者がさらなる情報を要求し、回答者が情報を補足したり言い直したりする〈回答確認〉である。

相談の談話の〈相談内容確認〉→〈回答〉→〈回答確認〉の流れに対し、『真相はこうだ』の「中間部」には〈質問〉→〈回答〉→〈評価〉の流れが存在する。まず最初の「話段」について述べると、文筆家は太郎の質問(4)(6)(8)のあとすぐに回答(5)(7)(9)をしており、質問の意図を尋ねるなどの確認はしないため、〈相談内容確認〉を伴わない〈質問〉の「話段」が成立する。この〈相談内容確認〉の不在から、太郎は質問をランダムに繰り返しているようでいて、文筆家が求める的を得た質問をして語りたい情報を語らせる役割、つまり、文筆家の発話を一方向的な主張ではなく双方向的な質問の回答として引き出すように手助けをする役割を担っていることを指摘できる。

このような視点から、太郎の発話に特徴的な一連の「～んですか」という文末表現を考

察すると、単なる質問者には留まらない太郎の役割が際立ってくる。最初の「～んですか」(4)は、「戦争犯罪人」が「犯罪を犯した」という内容を前提にして太郎が発話していることを示す。同様に、続く「～んですか」(6) (8) から、「軍国主義者」が「思想警察を作った」、及び、彼らを「敗北に導く唯一のもの」が存在したという、文筆家の直前の〈回答〉(5) (7) より得た情報を前提にして太郎が問いを投げかけることがわかる。つまり太郎は、〈回答〉(5) (7) をすぐに理解し、〈回答確認〉の「話段」を省いて、文筆家に新たな〈質問〉(6) (8) をしている。よって「～んですか」(4) (6) (8) は、その繰り返しにより質問者としての太郎の役割を前面に押し出しつつ、〈回答〉(5) (7) を即座に理解し納得するという、文筆家にとって理想的・模範的な聞き手としての太郎の役割を見えにくくする働きを持つ。換言すれば、太郎の見せかけの無知の観点付けストラテジーにより、質問すべてに的確に答えていく文筆家の全知の観点付けストラテジーを必然的に成立させることができる。全知の文筆家の〈回答〉(5) (7) (9) は、無知の太郎が〈質問〉(4) (6) (8) により積極的に求めた結果与えられるものとして語られ、さらに、〈質問〉(6) (8) では、太郎の口から、太郎が納得済みの真実性が担保された前提として再提示される。

「～んですか」(4) (6) (8) で問いを畳み掛ける太郎に対し、文筆家は「～んです」(5) (7) (9) (11) という似通った文末表現を計8回も多用して応答し、質問1~3の最後の〈評価〉の「話段」を「～んですね」(11) という文末表現で締めくくる。「のだ」の「の」が音変化を起こし敬体化した「～んですね」は、質問4の最後の〈評価〉(22) にも確認できるが、この機能を考えてみると、まず「のだ」は、話し手の発話を「解釈として受け入れさせようという話し手の聞き手に対する発話意図を聞き手に対して伝達する」(名嶋2007: 146) 機能を持つ、説明の「のだ」として捉えられる。次に、「～んです」に後続する終助詞「ね」は、情報伝達機能に加え、話し手が「聞き手から受容や共感を求める自分の要求を表現する」(福島 et al 2006: 70) 対人関係機能を持つ。よって、文筆家が質問回答を総括する際の「～んですね」(11) (22) は、太郎から「はい、そうですね」という同意を期待する、聞き手の存在を強く意識した談話標識であると言える。

『真相はこうだ』のテキストを一貫性を保ちつつ構造化する「～んですか」と「～んです」・「～んですね」という、類似した響きを持つ談話標識の機能の違いを確認することにより、「中間部」で太郎と文筆家が任されていたのは、「真相」を問うて引き出す役割と、「真相」への共感を得るために説明する役割であったことが判明した。加えて、「～んですか」と尋ねる太郎をきっかけとして「～んですね」と答える文筆家という、二人の〈装いの無知／希求された全知〉の観点ストラテジーの対称性、あるいは前者ありきで後者が存在するコンビネーションを突き止めることで、対話形式を採るからこそ巧妙な独話が達成されるという「中間部」の会話の本質を明らかにした。

5.3. 「～んですね」の共鳴に見る、太郎と文筆家の関係性

本項では、太郎の〈質問〉→文筆家の〈回答〉→文筆家の〈評価〉という「中間部」の「話段」の流れに沿わない、文筆家の〈質問〉(16)に対する太郎の〈回答〉(17)と、太郎の〈評価〉(21)の二箇所に着目し、二人の関係性を掘り下げて考察したい。

まず、質問・回答の役割交代がある箇所を確認する。リットン報告書を知っているか(16)と文筆家が尋ね、太郎が知らない(17)と答えると、知らなかったはずだ(18)と文筆家が続ける。このように、聞き手が知識として持っていないことを知りながらその情報をあえて話し手が聞き、そのあと自ら答えを提示する手法は、教師と生徒の談話に顕著に見られるものである。この手法は「教師のテクニク (teacher's technique)」(Burton 1980: 85)と呼ばれ、話し手の優位性を強調する効果があるとされる。よって文筆家は「真相」を「暴露」する際、目上の教師という立場から太郎という目下の生徒に「真相」を教示していたと言える。役割交替の箇所から見えてくる教師と生徒という上下関係の存在は、文筆家が太郎に「いいですか」(5)(18)と窺める呼びかけや、「分かりましたか、太郎君」(11)と高圧的に呼びかける発話からも裏付けることができる。

注目すべきは、太郎が「彼らは3年前にも同じことを学校で話しました」(15)と代名詞「彼ら」で指す人々が、直後の文筆家の質問(16)をきっかけに、「いえ、先生はリットン報告書については、何も言いませんでした」(17)と、太郎自らにより「先生」と言い直される点である。呼称に着目してもう一度この役割交替の場面を見てみると、「先生」(17)は軍国主義者と呼ばれても良いはずだが、少年太郎の置かれた「学校」という環境で絶対の信用を寄せられるべき「先生」(17)があえて引き合いに出され、文筆家の「そうでしょう。先生はそのことについては教えなかったはずですよ。だって、リットン報告書は、本当のことをぶちまけてるんですからね」(18)という発話が続く。このやり取りでは、太郎が先に「彼ら」(15)を「先生」(17)と呼ぶ命名ストラテジーにより、文筆家は単にその呼称を引き継いだだけであって自ら「先生」(18)を糾弾したのではないと、独話的な主張を太郎の発話に導かれた会話的な応答として提示している。

加えて、「先生」は「本当のことをぶちまけてる」「リットン報告書」を「教えなかった」(18)という文筆家の叙述ストラテジーは、「先生」と太郎の間に〈真相を教えなかった先生／真相を教えられなかった生徒〉という敵対関係を築く。さらに、「いいですか」以降(18)の文筆家の「真相」の教示により、戦中「真相」を教えなかった「先生」に代わり戦後新たに文筆家が現れたと、〈真相を教える今の文筆家／真相を教えなかった昔の先生〉という善悪関係が文筆家と「先生」の間に築かれる。つまり、(15)～(18)のやり取りには、太郎と文筆家の上下、「先生」と太郎の敵対、文筆家と「先生」の善悪という関係構築により〈先生／太郎／文筆家〉の三者が結びつけられ、戦中太郎の上に立った「先生」の立場に戦後文筆家がスライドし、「先生」を糾弾しつつ善の教化をする上下関係を太郎との間に築くことを正当化する論証ストラテジーが認められる。

次に、もう一つの例外箇所太郎の〈評価〉(21)を見る。柳条湖事件の「真相」を語る文筆家に対し、「じゃあ、何もかも知ってのことだったんですね」(21)と、文筆家の発話に特徴的な談話標識「～んですね」を太郎が用いて満州事変に対する評価を述べるのがその箇所である。ここでは、名嶋(2007)を今一度参照し、文筆家の「～んですね」と太郎のその違いを把握することが重要である。先述した文筆家の説明の「のだ」とは違い、太郎の「のだ」は、「話し手が当該命題を話し手の思考に登録したことを当該発話の受信者に伝達する」(p. 118)機能を持つ発見の「のだ」であると考えられる。よって「～んですね」(21)は、それまで「～んですか」(4)(6)(8)で質問に徹していた太郎が、文筆家の教える「真相」を理解したという大きな変化を示す。文筆家と太郎の見解が初めて一致したことを示す二人の「～んですね」(21)(22)の共鳴により、本テキストの山場、そして狙いは、教育的コミュニケーションの達成にあったと指摘することができる。

5.4. 聴取者の位置付け

太郎の「真相」の発見と理解を示す「～んですね」(21)の表出を踏まえると、これまで考察した文筆家の「～んですね」(11)(22)に関し新たな疑問が浮かぶ。それは、文筆家の〈評価〉(11)(22)のあとにも来るべき、太郎からの「～んですね」による理解の明示がないまま「中間部」が進行する点である。太郎の無知を装っていたことからすれば、反応が無いのはある意味当然だが、この反応不在の「～んですね」(11)(22)の機能を改めて見直すと、文筆家が「はい、そうですね」という同意を期待する生徒として想定する聞き手は、太郎ではなく、ラジオに耳を傾けていた聴取者であったと解釈することもできる。このように考えると、不特定多数の聴取者に発せられていた「ね」(11)(22)は、「真相」の受容・共感の要求に加え、実際には共有されていない「擬似共有情報」(林2008: 101-102)をあたかもそうであるかのように提示し、聴取者との間で「真相」を共有知識として構築するための談話標識として捉え直すことができる。

ここで、「開始部」にさかのぼり、番組冒頭から聴取者の存在がどのように言及されてきたかを確認したい。聴取者は、アナの「我々日本人は、今日すでに戦争犯罪とはどんなものか分かりましたね？」(1)との第一声により代名詞「我々」で呼びかけられる。しかしアナは、番組は「皆様に直接関係のある話であり、皆さんを暗闇の世界から明るい世界に連れ戻す為の話です」(3)と続け、「我々」に「関係のある話」とは言わない。よって、「我々日本人」(1)から「皆様」「皆さん」(3)へと変化するアナの命名ストラテジーから、聴取者は「真実」を知らぬ「暗闇の世界」にいる「日本人」として、「真実」を知っている「明るい世界」にいる「日本人」のアナとは区別されることがわかる。

続いて「中間部」では、太郎が「戦争犯罪人は、我々に対してどんな犯罪を犯したんですか？」(4)と聞くと、文筆家は「あなた方は[...]分からないのでしょうか？」(5)と答える。このやり取りでは、太郎一人が発話するにもかかわらず、太郎は複数形一人称

「我々」を用いて自身を呼び、文筆家は丁寧な複数形二人称「あなた方」で太郎を呼ぶ。ここから、太郎という日本人男性を代表する名を充てがわれた登場人物は日本国民という上位カテゴリーの提喻であり、聴取者の代表として描かれていたことがわかる。加えて、文筆家の「あなた方」(5)という呼称には、アナが聴取者を「皆様」「皆さん」(3)と呼ぶのと同じ命名ストラテジーが認められる。つまり、文筆家もアナ同様に、「真実」を知っている側の「日本人」として描かれていることがわかる。よって、命名ストラテジーに着目した考察により、『真相はこうだ』における会話は、アナと文筆家という全知の新たな先生が、太郎に代表される聴取者という無知な生徒に「真相」を教化する会話だと指摘できる。

しかし注意すべきは、太郎は無知を装っているだけで、実際にはアナと文筆家と同じく「真相」をすでに知っている、あるいは、「真相」を即座に理解し納得する、CIEの理想的な聞き手であるという点である。聴取者を太郎と同じ立場に立たせ、ラジオの会話に引き込む働きかけをする『真相はこうだ』は、いかなるストラテジーを駆使して「擬似共有情報」を伝え、まず太郎を、そして聴取者を説得し、彼らとの間にどのような共有知識を築こうと試みたのだろうか。次項では、大戦の「真相」をめぐる「擬似共有情報」の内容と提示のされ方を見る。

5.5. 太平洋戦争史観の提示

本項では、言い換えの命名・叙述ストラテジーに着目し、それにより概念をすり替えながら太平洋戦争史観を聴取者に伝えていく論証ストラテジーを浮き彫りにする。

「開始部」では、先述のアナの「我々日本人」(1)から「皆様」「皆さん」(3)への言い換えに加え、「戦争犯罪」(1)から「戦争犯罪人」(2)(3)への言い換えが確認できる。具体的には、まずアナによる「戦争犯罪とはどんなものか分かりましたね？」(1)との問いかけに、「ええ、軍閥の顔ぶれや戦争犯罪人の名前は分かった」「誰なんですか？」(2)と声が錯綜し、アナが「これから三〇分ほどのうちに、戦争犯罪人を究明していきましょう」(3)と続ける。このやり取りでは、「戦争犯罪」とは「戦争犯罪人」であると聴取者に理解させるのが狙いではなく、第3項で見た太郎から文筆家への「先生」(17)(18)の引き継ぎのように、「戦争犯罪人」という名詞を声に先に出させてからアナがそれを引き継ぎ、あくまで声の「戦争犯罪人」は「誰なんですか？」(2)という疑問に端を発して「戦争犯罪人」にまつわる「戦争犯罪人を究明」(3)をしようと、リクエストに応えるようにしてアナの話始める狙いがあると考えられる。

「戦争犯罪人」という言葉は「中間部」の太郎の台詞(4)へ引き継がれ、今度は文筆家により「軍国主義者」(5)と言い換えられる。『真相はこうだ』第1回は1945年12月9日に放送されたことを踏まえれば、1948年11月に東京裁判判決が下る以前、さらに言えば1946年5月の東京裁判開廷以前の時点で、「軍国主義者」は戦争犯罪容疑者ではなく

「戦争犯罪者」であるとの前提を持って語られていたことがわかる。太郎はなぜこの前提が成立するのかを文筆家を遮り尋ねることもなく、三連続の名詞の言い換えにより GHQ に有利に働く見解を聴取者に刷り込む論証ストラテジーが展開する。

「戦争犯罪人」を「軍国主義者」と定義したのち、質問 1～3 をする太郎に対して文筆家は、「思想警察を作ったのは彼等なんですからね」(5) と、「軍国主義者」を指す代名詞「彼等」を強調する分裂文、「彼等是一个のものを恐れていたんです。自分たちを敗北に導く唯一のものをね」(7) と、自身の (9) の回答に勿体を付けるような倒置文、「事実なんです。真実なんです。彼等は事実を隠したんです」(9) と、「事実」「真実」「事実」と脚韻を踏んだ類義語と「～んです」の文末表現の繰り返し、⁹ という三連続の強化ストラテジーで畳み掛けることにより、「軍国主義者」は「事実の隠蔽」に「全力を尽くした」(9) との主張を聴取者に対し印象的かつ効果的に伝えていく。

「中間部」から「終結部」にかけては、質問 4 のやり取りの評価として文筆家が「昭和 6 年の 9 月 18 日の夜の柳条湖事件」は「世界大戦の導火線」(22) だと言ったあと、「軍国主義者たちの侵略」こそが「昭和 16 年日米開戦の導火線」(23) であると述べる。整理すると、従属部は「柳条湖事件」(22) から「軍国主義者たちの侵略」(23) へ、主要部は「世界大戦の導火線」(22) は「昭和 16 年日米開戦の導火線」(23) へとそれぞれ変化しており、従属部と主要部それぞれで言い換えが起きているのがわかる。

これらの言い換えを注意深く見てみたい。まず、主要部の「世界大戦」(22) から「昭和 16 年日米開戦」(23) への言い換えは、日本対連合軍の「世界大戦」から、日本対アメリカ、特に真珠湾攻撃を意識した「日米開戦」へと、GHQ の関心に沿って先の大戦をめぐる話題的を絞る。一方、従属部の「柳条湖事件」(22) から「軍国主義者たちの侵略」(23) への言い換えは、中国における日本の戦闘は「軍国主義者」が主導した侵略行為だと規定し、GHQ の太平洋戦争史観を新規に提示する。よって主要部には、世界大戦は日米開戦を含むという国民が戦中から理解していた情報、従属部には、満州事変は日本軍の侵略だという本放送回が新たに示す情報というように、焦点の当たる主要部には既知情報の言い換え、焦点のぼける従属部には新情報の言い換えを据える複雑かつ巧妙な言い換えが確認できる。強化・緩和ストラテジーのコンビネーションを駆使した論証ストラテジーによって、「導火線」(22) (23) の繰り返しで聞こえの上では似通ったフレーズの連続のうちに CIE の太平洋戦争史観が織り込まれていたと言える。

文筆家による説得の末、「あなたのお話は、歴史の本に書いてあるのと大分違っています」(24) と、太郎はそれまで呼ぶことのなかった文筆家を敬意を含む二人称「あなた」、

⁹ 繰り返しの効果の詳細は、van Dijk (1998: 273) を参照。統語構造の並行性や脚韻・頭韻は、談話に対して払われる注意を増す効果があるので、話し手の意図通りにある出来事のモデルが聞き手の記憶に残る確率が高まると指摘されている。

そして、丁寧さを示す接頭辞「お」を用いて文筆家が語った満州事変の「経歴」(23)を「お話」と指示し、文筆家から語られた貴重な「真相」により過去に「歴史の本」から得た自身の知識が改められたことを伝える。つまり、「終結部」においてついに、文筆家が「お話ししたかった」「経歴」(23)は太郎との共有知識となる。それを受け文筆家は、「中間部」で「分かりましたか、太郎君」(11)と窺っていたのとは対照的に、「そうなんですよ太郎さん、その通り」(25)と、目下の人物を指す「君」ではなく敬意と親愛を表す「さん」を用いて、二者が合意に至ったことを讃えてみせる。

太郎と文筆家の最後のやり取り(24)(25)で、『真相はこうだ』のテキストが託された教育の目的は完全に達成されたかのように思える。しかし、「終結部」はそれだけでは終わらない。本節の最後に次項では、「終結部」に見られる言語使用の形式の矛盾に着目して、第1項で後述するとした「開始部」と「終結部」を貫くメッセージの分析を行う。

5.6. 日本占領をめぐるメッセージ

文筆家は、太郎の同意(24)を得る前は「私は満州事変がどうして起こったのか、また、軍部の連中が平和的手段によって問題を解決しようとしなかった経歴をお話ししたかったんです」(23)と、「軍部」の行為を動詞の過去形を用いて述べる。これは、「中間部」での文筆家による「軍部」の描写にも共通している。しかし、同意を得たあとは、「軍部の勢力が非常に強く、事実を隠すことが彼らにとっては利益です」(25)と、現在形を用いて「軍部」の描写をする。この叙述ストラテジーに着目すると、日本軍敗戦が確定したあとも「軍部の勢力が非常に強い」という文筆家の発言は、大戦の過去をめぐるのではなく占領期の現在をめぐる、「軍部」並びに「軍部」を支持する勢力がいまだに大戦の「事実を隠している」ことについての糾弾であると解釈することができる。

この見方に基づき、文筆家からアナへと『運命』(26)で繋がれる「だが、真実を覆い隠す雲は取り除かれ、わが将兵は進軍を止め、今や ...」(25)「今や真実が進軍を始めました!」(27)という、「今や」の反復で現在の視点が強調される最後の台詞を考えたい。まず、「真実を覆い隠す雲」は、本放送回の放送時、占領下の1945年12月現在も事実を隠蔽している「軍部」を指すメタファーとして捉えられる。その「雲」は自然に切れたり流れたりするのではなく、行為者の存在を想起させる動詞を用いて「取り除かれる」と表現される。その「雲」を「取り除く」行為者とは、「わが将兵は進軍を止め、」「真実が進軍を始めました!」という対照的な描写からも推測できるように、日本軍に代わって日本に進駐するGHQを指すと思われる。つまり「真実」とは、GHQという主体の明示を避けるための言葉であり、「軍部」を批判して非軍事化・民主化を達成する番組には一見そぐわない「真実が進軍を始めた」というフレーズは、メディアを介して「真実」を教化するGHQがまさに「今」(25)(27)行う日本占領を正当化する姿勢の表れと解釈できる。

この姿勢は、アナの「開始部」の台詞と照らし合わせることにより、本放送回全体を貫

く GHQ・CIE の意識としてより鮮明に浮かび上がってくる。冒頭の台詞でアナは、やはり「今」を強調して聴取者にこう呼びかけていた。「今こそ、真実のお話ができます。」「これは皆様に直接関係のある話であり、皆さんを暗闇の世界から明るい世界に連れ戻す為の話です」(3)。注目したいのは、先述の「取り除く」(25)と同様、行為者が必要な「連れ戻す」という動詞である。聴取者が「暗闇の世界」にいるのは「軍部」の「雲」の下にいるためであり、その「雲」を「取り除き」、聴取者を「明るい世界に連れ戻す」のが「真実のお話」、つまり、GHQ が『真相はこうだ』で繰り広げる「お話」だと主張する。よって、「終結部」と「開始部」を合わせて考察することで、〈軍部／聴取者／GHQ〉という三項関係が浮き彫りになると同時に、「雲」としての「軍部」の下で「暗闇の世界」にいる聴取者を、「明るい世界に連れ戻す」ために「真実」を教化、啓蒙する GHQ という、日本占領を善として語る論証ストラテジーを指摘できる。

ここで重要なのは、「軍部」に代わり聴取者のために行動する目的があるとして、権力者が自身を正義の、信頼に足る存在だと主張する論証ストラテジーである。このストラテジーは、第3項で明らかにした〈先生／太郎／文筆家〉の関係の成立にも見られたものである。〈軍部／聴取者／GHQ〉と〈先生／太郎／文筆家〉の二つの三項関係を照合してみると、文筆家は、GHQ という主体を明示しないままに太郎を通じて「真相」を聴取者に教え伝える役割を担っていたことが明らかになる。ここで再び、太郎が無知を装っていたことを踏まえれば、放送を通じて先の大戦をめぐる「真相」を聴取者に教化することで「今」の日本占領を正当化する GHQ からの一方的独話を、太郎と文筆家の国民同士による会話に仕立て上げることこそ、『真相はこうだ』の真髓があると結論付けられる。

6. 占領初期における「真実」・「真相」の意味

本節では、「真実」・「真相」というディスコース・トピックで『真相はこうだ』と繋がりを持つ、放送準則や声明など他のジャンルに属する複数のテキストを参照し、間テキスト性の観点から『真相はこうだ』が布置されていたコンテキスト分析を試みる。

GHQ は日本に進駐して間もなく、連合国・占領軍に関する報道制限を規定する「新聞の自由に関する覚書」を出した。しかし、日本の報道機関による違反が相次いだため、1945年9月下旬に新たに「プレス・コード」と「ラジオ・コード」を発令した。後者の報道放送に関する準則は全11項から成り、皮切りの第1項には「報道放送ハ嚴重真実ニ即応セザルベカラズ」(一次史料 NHK 1987: 112)と記されていた。GHQ が報道の自由を推進していた一方で、ここで用いられる「真実」は報道が「即応しないことがあってはならぬ」もの、つまり、「真実」は報道によって検証され、新たに見出されるものではなく、報道に先立ってすでに存在するものとして提示された。

また、「ラジオ・コード」が発令される約1週間前、GHQ 傘下機関である民間検閲支隊

(Civil Censorship Detachment) のフーバー大佐は、報道関係者に向けて下記の声明を発表していた。「マッカーサー元帥は、[...] 議論が真実であること、公安を害しないこと、日本を敗北から再生させようと願う国民の努力を阻害しないことを指示したのである。[...] 皆さんは、国民に真実を伝えないという点で公安を害しているのであり、国民に対し日本の置かれている状況を正確に伝えようとしていない」(一次史料NHK 1987: 110)。「公安」という言葉を繰り返す強化ストラテジーによって、報道関係者に対し、「真実」を社会の秩序を保つものとして印象付ける狙いがあったことがわかる。占領下日本社会の混乱を避けたいのは、国民以上にGHQの「願い」であったはずだが、フーバーは、人道主義のトポスと正義のトポス¹⁰に立ち、「真実の報道=国民のため」という論証スキーマによりGHQの益を国民の益にすり替えた上で、GHQの言論統制を「国民に真実を伝え」、「日本を敗北から再生させる」活動として正当化する。

GHQのためではなく国民のために、という「真実」を求める主体のすり替えは、『『真相はこうだ』、日本人聴取者の間で大反響を呼ぶ連続ラジオ番組』との見出しが付いた、1946年1月29日のニッポンタイムズ(*Nippon Times*)の記事に一層顕著に現れている。¹¹

GHQは、日本の独占的通信社であった同盟通信社の解散を命じたが、同社とともに日本の対外宣伝の一端を担ったニッポンタイムズは、占領政策に関する情報を日本人読者に伝える手段、並びに、日本で活動する占領軍兵士に日本人の声を英語で伝える貴重な手段として存続が認められた(松永2013: 237)。ニッポンタイムズは事前検閲の対象であったため、GHQに有利に働く世論形成が実践されていた可能性が高い。¹²

当該記事では、7人の日本人の匿名コメントが紹介される。「いち早く真実を聞きたいと願うこの気持ちは[...] 私たちに共通する想いです」など、肯定的なコメントが並ぶ。声の主が他の『真相はこうだ』の聴取者を含めて自身を「私たち」と呼ぶ命名ストラテジー、加えて、「私たち」は番組に対して「共通する想い」を抱くと形容する叙述ストラテジーにより、この特定のコメントは、国民が皆一様に『真相はこうだ』を積極的かつ好意的に聞いていたかのような印象作りに寄与している。

¹⁰ トポスは、論証ストラテジーの根拠として用いられる概念で、2つの異なる命題を繋ぐ結論規則を指す。頁数の制限により本稿では詳説できないが、トポスに関してはヴォダック([2001] 2010: 106-111)、神田(2015: 162-163)、名嶋(2015: 299-301)を参照。

¹¹ この新聞記事は、GHQ傘下で非軍事的な事柄に関し史料収集・報告書作成を担当した民間史料局(Civil Historical Section)の、ラジオ放送に関する史料フォルダー(一次史料CHS)に保存されていたものである。この史料フォルダーは、国会図書館憲政資料室にて、事前の手続きなく閲覧可能である。記事の日本語訳は、筆者による。

¹² 実際には、番組に肯定的な投書以外に、「早すぎてついていけない」、「あんな非国民みたいなことがよくもいえますね」など、『真相はこうだ』に対して聴取者から批判・非難の投書が放送局に殺到したとの記録がある(竹山2002: 329-330)。

注目すべきは、匿名コメントの紹介に続く、「長い間軍国主義者に騙されていた」ので、「真実に飢えた日本人 (truth hungry Japanese)」は、『真相はこうだ』に「心からの感謝を示している」との記述である。「騙されていた」との叙述は、〈虚偽／真実〉の対立軸を読者に想起させ、日本人は「長い間」「騙されていた」のだから「真実」をこれからは知るべきだ、という解釈に誘導する。ここで、「真実」を知りたい、あるいは「真実」を求め、ではなく「真実に飢えた」と、「真実」を食のメタファーで捉えることにより、〈真実＝食〉を与える養育の義務を怠った「軍国主義者」のせいで「日本人」は敗戦という生命の危機に晒されたのだと、危険・脅威のトポスと人道主義のトポス双方に立って「軍国主義者」を糾弾するニッポンタイムズの姿勢が読み取れる。

〈真実＝食〉のメタファーは、〈軍国主義者は加害者／日本人は被害者〉の対立を明確にするのみならず、日本敗戦後『真相はこうだ』を放送し、新たな養護者として「日本人」に〈真実＝食〉を与える GHQ の存在を明示しないまま正当化できる巧妙な叙述ストラテジーでもある。つまり、〈真実＝食〉のメタファーにより、〈真実を伝えなかった軍国主義者は加害者／真実を与えられなかった日本人は被害者／真実を報道、放送する GHQ は救済者〉という三項関係が暗に構築されるのである。先に引用した匿名コメントが「いち早く真実を聞きたいと願う」と述べていたように、「飢えた」日本人にラジオで「いち早く」〈真実＝食〉を届けるのが『真相はこうだ』であり、「真実」は決して GHQ が押し付けるものではなく、「日本人」が「共通して」「聞きたいと願」い、「心からの感謝を示す」ものとして、新聞読者に伝えられていたことがわかる。

ディスコース・トピックを頼りにした本節の分析から、占領初期当時の社会的・政治的コンテキストが、『真相はこうだ』のテキストと絡み合いながらそのことばを形作った過程がより具体的に見えてくる。ラジオ放送のテキストで象徴的に用いられた「真実」・「真相」という二語は、占領下社会というコンテキストにおいても、国民の主体的議論からは見出されない既存の「即応」すべきもの、かつ、社会の「公安」を保つゆえ国民の益になるものという意味を持って GHQ により用いられていた。加えて、ニッポンタイムズの〈真実＝食〉のメタファーが築く三項関係と、前節で分析した〈軍部／聴取者／GHQ〉の三項関係との一致から、善の GHQ は悪の軍国主義者に代わり日本に進駐するが、「真実」はあくまで国民自らが戦中の「飢え」から回復するために求めるものであり、国民に現在の占領を肯定的に捉えさせたいという GHQ の意識がより明確に浮かび上がる。以上、「真実」・「真相」という言葉を切り口に、GHQ が占領下のメディア統制をめぐる社会的権力を生産し、その権力がラジオ・新聞のテキストにより再生産される循環的現象を明らかにした。

7. おわりに—CDS・DHAがもたらす、横断領域的研究の可能性—

本稿は、戦後間もなく放送されたラジオ番組の原稿という、言語学の先行研究では看過されてきた歴史的一次史料に着目し、対象テキストを分析、解釈するにあたり明確な理論的背景と研究姿勢を持つCDSの枠組みを導入することで、GHQが第二次大戦後日本社会において築き上げようとした占領という権力の可視化を行った。CDSの多種多様なアプローチの中でもDHAに依拠することにより、太郎と文筆家という〈国民の声〉はそれぞれ誰を模していたのか、及び、本来一方向的なCIEのメッセージ伝達はどのように双方向的な〈会話〉のやり取りとして組み立てられ、聴取者の耳にラジオを通じて届けられたのかを、占領当時の社会的・政治的・歴史的コンテキストに同じく布置された複数のテキストと照らし合わせながら総体的に明らかにした。

以下は補足的な考察だが、DHAでは、間テキスト性に着目した分析を行うにあたり、言語学分野を超えて幅広い一次・二次史料を収集し、読解することが求められる。他分野の先行研究や歴史的史料を意識的に、積極的に参照することで、言語学的な分析結果をより大枠の歴史的文脈に位置付けて、テキストがコンテキストを、また、コンテキストがテキストを作るその循環的關係を浮き彫りにしながら、話し手・書き手の潜在的意識を可視化することができる。

例えば、占領期メディア史の代表的研究である有山(1996)は、「満州事変から敗戦までを一連の歴史的過程と捉える」(p. 249)見方は、『太平洋戦争史』と『真相はこうだ』で日本国民に初めて示された太平洋戦争史観の特定の見解であったと指摘している。「導火線」は事件を起こす契機という辞書的な定義を持つが、満州事変の発端となった柳条湖事件が「導火線」(22)(23)と捉えられることで、日本の対中戦が引き金となった世界大戦により日本が敗戦するに至ったという一連の流れを、戦争の詳細を知る由もない聴取者に対し故意に簡略化して提示し、理解させる効果があったと分析することができる。

また、日米外交史の観点から賀茂(2018)は、占領開始直後から戦犯の処罰などをめぐり日米の軋轢が深まりを見せ、日本側の抵抗を封じ込めるために「戦争の有罪性」と「敗戦の事実」を日本人に理解させることを目的として「ウォー・ギルト・プログラム」という情報教育政策が計画され、CIE設立直後の1945年9月から実行に移されたことを指摘している。興味深いことに、『太平洋戦争史』と『真相はこうだ』はプログラムの重要事例であった。『真相はこうだ』が占領下社会の安定を見据えた現在をめぐる放送であった、という本稿の考察の裏付けとなるプログラムにより番組が企画、制作されていたことを注記しておきたい。

新聞からラジオへと、番組形式の変更理由を示す直接的な史料がなくとも、歴史的な文脈を汲むことのできるDHAの手法に依拠することで、ラジオのことはから見えるGHQの占領の意識を明らかにすることが可能となった。CDS・DHAにより、歴史的なメディア

のことばを分析対象として見つめ直すことで、メディア史や日米外交史など他分野と言語学との横断領域的研究の達成がより確かなものになると考える。

付録 『真相はこうだ』第1回 1945年12月9日（日曜）午後8時～8時半放送竹山（2011: 28-32）から抜粋引用

1	アナ	<u>我々日本人は、今日すでに戦争犯罪とはどんなものか分かりましたね？</u>	開始部	
2	声 (複数)	<u>ええ、軍閥の顔ぶれや戦争犯罪人の名前は分かった。／誰なんですか？／誰ですか？／それは誰ですか？ [...]</u>		
3	アナ	<u>まあ、まあ待ってください。ただいま申し上げます。これから三〇分ほどのうちに、戦争犯罪人を究明していきましょう。とにかく、なにをおいても事実を申し上げます、事実を。皆さんが自分で結論が下せるように、日本の戦争犯罪人について、自分で判断が下せるように。 今こそ、真実のお話ができます。これは、全日本国民に戦争についての真相を明かす初めての番組です。これは皆様に直接関係のある話であり、皆さんを暗闇の世界から明るい世界に連れ戻す為の話です。</u>		
...				
4	太郎	<u>そういう戦争犯罪人は、我々に対してどんな犯罪を犯したんですか？</u>	中間部 質問1	質問
5	文筆家	<u>あなた方は、放送をする人とか、新聞など、軍国主義者の道具であったということが分からないんでしょうか？ [...] いいですか、思想警察を作ったのは彼等なんですからね。</u>	戦争 犯罪人	回答
6	太郎	<u>ですけど、どうしてでしょう、どうしてそんなことをしたんですか？</u>	質問2 犯罪の 動機	質問
7	文筆家	<u>彼等は一つのものを恐れていたんです。自分たちを敗北に導く唯一のものをね。</u>		回答
8	太郎	<u>いったいそれは何なんですか？</u>	質問3	質問
9	文筆家	<u>事実なんです。真実なんです。彼等は事実を隠したんです。この事実の隠蔽ということに、軍国主義者は全力を尽くしたんです。</u>	戦争 犯罪人の 恐れ たもの	回答
10	アナ	(治安維持法の引用の読み上げ)		証拠
11	文筆家	<u>分かりましたか、太郎君。これがそもそものことの起こりなんです。これが世論を押さえつける障壁の第一歩だったんですね。</u>		評価
...				

12	効果音	汽車の汽笛、銃砲・機関銃の炸裂音	質問4 柳条湖 事件	証拠
13	アナ	[...]ただいま入りました報道によりますと、支那のゲリラ部隊が長春行きの急行列車を爆破しようと企てました。わが軍に対する総攻撃の危険を制するため、わが勇敢なる軍隊は、ただいま南満州を横断中で、長春から旅順に向かう地域を占領しつつあります。(戦況中継)		
14	文筆家	これが、昭和6年に、我々が信じていたところです。		
15	太郎	<u>彼らは3年前にも同じことを学校で話しました。</u>		
16	文筆家	えっ、リットン報告書について、何か聞きましたかね？	質問	
17	太郎	<u>いえ、先生はリットン報告書については、何も言いませんでした。</u>	回答	
18	文筆家	そうですね。 <u>先生はそのことについては教えなかったはずですよ。だって、リットン報告書は、本当のことをぶちまけてるんですからね。いいですか、事件の真相を知るために国際連盟は、リットン卿と連盟加入国の代表団の一行を、満州と日本に派遣して、調査させたんです。[...]</u>	回答	
19	ナレ	その結果、日本軍が満州でとった軍事行動は、合法的な正当防衛の措置ではない、ということが判明しました。[...]	証拠	
20	文筆家	日本軍は数ヶ月も前から、まるで下稽古でもしていたかのように、うまく行動したんです。ある部隊のごときは、事件が起これぬうちに駐屯区域を出発していたんです。	回答	
21	太郎	<u>じゃあ、何もかも知ってのことだったんですね。</u>	評価	
22	文筆家	ええ、そうです。まあ、 <u>昭和6年の9月18日の夜の柳条湖事件は、実際上からいうと、世界大戦の導火線だったと言えるわけです。他の国々は、世界平和を維持するために努力したんですが、日本の軍閥は、戦争の勃発の為に務めたことになるんですね。</u>	評価	
...				
23	文筆家	私が今晚お話ししたいと思ったのは、昭和6年における、 <u>わが軍国主義者たちの侵略の第一歩</u> についてです。この侵略こそが <u>昭和16年日米開戦の導火線</u> となり、とうとう現在の日本のみじめな状態を引き起こしたんです。 <u>私は満州事変がどうして起こったのか、また、軍部の連中が平和的手段によって問題を解決しようとしなかった経歴をお話したかったんです。</u>	終結部	評価
24	太郎	<u>あなたのお話は、歴史の本に書いてあるのと大分違っています。</u>		評価
25	文筆家	<u>そうなんですよ太郎さん、その通り。私が今晚はっきりさせようと思ったのは、その点です。軍部の勢力が非常に強く、事実を隠すことが彼らにとっては利益です。だが、<u>真実を覆い隠す雲は取り除かれ、わが将兵は進軍を止め、今や...</u></u>		評価
26	音楽	<u>ベートーベン第5シンフォニーの冒頭</u>	終幕	
27	アナ	<u>今や真実が進軍を始めました！</u>		

参考文献

- 有山輝雄. 1996. 『占領期メディア史研究—自由と統制・1945年—』東京：柏書房.
- Burton, D. 1980. *Dialogue and Discourse: A Sociolinguistic Approach to Modern Drama Dialogue and Naturally Occurring Conversation*. London: Routledge and Kegan Paul.
- 遠藤織枝（編）. 2004. 『戦時中の話しことば—ラジオドラマ台本から』東京：ひつじ書房.
- 福島和郎・岩崎庸男・渋谷昌三. 2006. 「終助詞「よ」と「ね」に関する研究の動向」、『目白大学心理学研究』2、65-74.
- Hart, C. and Cap, P. (eds.) 2014. *Contemporary Critical Discourse Studies*. London: Bloomsbury.
- 早川治子. 2004. 「『戦争キーワード』から見る戦時中のラジオドラマ」、遠藤織枝（編）『戦時中の話しことば—ラジオドラマ台本から』、163-194、東京：ひつじ書房.
- 林卓男（編）. 2008. 『談話分析のアプローチ：理論と実践』東京：研究社.
- 星野祐子. 2006. 「ラジオ相談番組における司会者の役割と言語行動」、『人間文化論叢』9、245-254.
- 井村誠. 2005. 「The Discourse-historical Approach の方法論」、日本時事英語学会 時事英語談話分析研究分科会『批判的談話分析（CDA）の手法と展望—イラク関連記事の分析を中心に—』、35-46、大阪：日本時事英語学会 時事英語談話分析研究分科会.
- 賀茂道子. 2018. 『ウォー・ギルト・プログラム—GHQ 情報教育政策の実像』東京：法政大学出版局.
- 神田靖子. 2015. 「新聞投稿と新聞社の姿勢—新聞社は意図的に投稿を選んでいるか—」、名嶋義直・神田靖子（編）『3.11 原発事故後の公共メディアの言説を考える』、157-198、東京：ひつじ書房.
- 松永智子. 2013. 「占領下の英語経験と Nippon Times」、『京都大学大学院教育学研究科紀要』59、235-247.
- Mey, J. 2001. *Pragmatics: An Introduction* (2nd edition). Malden, MA: Blackwell Publishers.
- 名嶋義直. 2007. 『ノダの意味・機能：関連性理論の観点から』東京：くろしお出版.
- 名嶋義直. 2015. 「特定秘密保護法に関する記者会見記事の批判的談話分析—ミクロ面の分析を中心に—」『文化』78(3)、1-24.
- 太田奈名子. 2018. 「占領期ラジオ番組『質問箱』の内容分析—娯楽・宣伝・啓蒙番組で語られたウォー・ギルト—」『メディア史研究』44、129-147.
- 鈴木香子. 2002. 「ラジオの医療相談の談話の構造分析」、『早稲田大学日本語教育研究』1、117-130.
- 鈴木香子. 2003. 「ラジオの心理相談の談話の構造分析」、『早稲田大学日本語教育研究』3、157-69.
- ザトラウスキー, P. 1993. 『日本語の談話の構造分析—勧誘のストラテジーの考察』東京：くろしお出版.
- 竹山昭子. 2002. 「『真相はこうだ』、『ラジオの時代—ラジオは茶の間の主役だった—』、303-345、京都：世界思想社.

- 竹山昭子. 2011. 「GHQの戦争有罪キャンペーン『太平洋戦争史』『真相はかうだ』が語るもの」、『メディア史研究』30、17-41.
- van Dijk, T. A. 1998. *Ideology*. London: Sage Publications.
- ヴァン・ダイク, A・テウン/野呂香代子(監訳). [2001] 2010. 「学際的なCDA—多様性を求めて」、ヴォダック, R・マイヤー, M. (編)『批判的談話分析入門—クリティカル・ディスコース・アナリシスの方法』、133-165、東京:三元社.
- Verschueren, J. 1999. *Understanding Pragmatics*. London: Arnold.
- Wodak, R. 2007. “Pragmatics and Critical Discourse Analysis: A cross-disciplinary inquiry.” *Pragmatics & Cognition* 15 (1), 203-225.
- ヴォダック, R./野呂香代子(監訳). [2001] 2010. 「談話の歴史的アプローチ」、ヴォダック, R・マイヤー, M. (編)『批判的談話分析入門—クリティカル・ディスコース・アナリシスの方法』、93-131、東京:三元社.
- ヴォダック, R・マイヤー, M./野呂香代子・神田靖子(他訳). [2015] 2018. 「批判的談話研究—歴史、課題、理論、方法論」、ヴォダック, R・マイヤー, M. (編)『批判的談話分研究とは何か』、1-32、東京:三元社.

一次史料

- CHS. GHQ/SCAP Records, Civil Historical Section. 1945/09-1949/09. “753: Radio Broadcasts (Includes comment on “Now It Can be Told” programs).” CHS (D) 00906-00907.
- NHK. NHK放送文化調査研究所放送情報調査部(編). 1987. 『GHQ文書による占領期放送史年表』東京: NHK放送文化調査研究所放送情報調査部.